

帆船〈あこがれ〉の「セールトレーニング」が始まったそのときへBACK! (最終話)

20年にわたって一般市民を対象にセールトレーニング事業を続け、今年3月をもって活動を終了した大阪市の帆船〈あこがれ〉。MJCマリン賞2013の大賞にも選ばれた同船の足跡を、同じ時期に民間組織で事業展開した帆船〈海星〉とともに紹介している。



日本の帆船としては80年ぶりの世界一周となった「ワールドセイル2000」の航海で、北大西洋のハリファクス(カナダ)沖を航行する〈あこがれ〉。事業開始から20年で180,721マイル(地球約8.36周相当)を走破した

1994年の出来事

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 2月12日 | リレハンメル・オリンピック開催。 |
| 4月 8日 | バンド、ニルヴァーナのカート・コバーンが自殺。 |
| 5月 1日 | F1サンマリノGPで、アイルトン・セナが事故死。 |
| 6月27日 | オウム真理教による松本サリン事件発生。 |
| 7月 8日 | 日本人初の女性宇宙飛行士、向井千秋氏、スペースシャトルで宇宙へ。 |
| 8月28日 | 気象予報士国家試験開始。 |
| 10月 | イギリスの数学者、アンドルー・ワイルズがフェルマーの最終定理を証明。 |

音楽：Mr.Children「Tomorrow never knows」、EAST END×YURI「DA.YO.NE」、奥田民生「愛のために」
映画：「シンドラーのリスト」、「男はつらいよ 拝啓車寅次郎様」

栄光の時代

民間団体でセールトレーニング事業を始めるにあたって最低限必要な12億円
の資金集めに苦勞しながらも、海外で格
安の帆船を手に入れ、経済界にさまざまなパイプを持つ大儀見 薫氏などの尽力
によって、どうにか事業のスタートラインに
着くことができた(海星)。そして、資金繰
りに不安はなかったものの、市民を対象に
したボランティアの運営組織づくりに奔走
しながら、世界でも稀な地方自治体による
セールトレーニング事業を開始した〈あ
こがれ〉。ともに、いろいろな課題を乗り越え
ながら夢を形に変えていったため、事業

の船出には多くの関係者が少なからず
不安を感じたものだったが、前号で紹介
したように、いざ出帆してみれば二隻の
帆船は見事に世間の風を集めて順調な
滑り出しを展開した。

「実際に帆船を手に入れて、『グランド・
レガッタ・コロンブス'92』という国際イベ
ントに向かって世界の海に出ていき、それを
小学館と集英社の全雑誌が紹介したこと
で、スポンサーの理解を得やすくなった一
方、セールトレーニングに関心を寄せて乗
りに来る人が増えていきました」(今井常
夫氏)

小学館と集英社のほか、サントリーや

NTT、住友海上火災、オムロンなど、名だたる企業が〈海星〉を支援。その企業の社員たちが研修航海を体験するほか、メディアや口コミをつとに、海や帆船に関心を寄せる一般の人たちが次々と航海プログラムに参加。1990年代半ばのピーク時には、年間1億円以上の収入を上げるまでに事業が成長した。

一方、〈あこがれ〉も市民によるボランティア組織が順調に育ち、トレーニー（航海訓練生）として乗船した人たちの多くもリピーターとなってさまざまな航海を体験。そのなかから、新たなボランティアが生まれていった。

「〈あこがれ〉の進水以降、事業の拡大とともに、船のメンテナンスやイベントのお手伝いといった、航海以外の役割が増えるに従って、ボランティアの登録はどんどん増えていきました。そのため、最初は50歳までの年齢制限を設けていたのですが、活動を続けながら50歳を超える人たちが出るようになって、『もっと続けたい』という声も聞こえたので、55歳まで延長したら、またすぐに年齢制限をクリアしてしまい、最終的に年齢制限は撤廃されました」（山岡真澄氏）

帆船の事業は、いろいろな分野からの協力で支えられる。ボランティアも年やそのときの状況で役割を変えることができるから、楽しさが長続きする、と語る山岡氏。ボランティアの家族、ボランティア同士の結婚などファミリー単位でファンが増える

「順調に進めば、日本も海洋国家の道を歩むことができると思った」

今井常夫（いまい・つねお）

1958年山口県生まれ。東京商船大学（現 東京海洋大学）卒。1982年に日本人で初めて英国の帆船〈マルコム・ミラー〉のセイルトレーニングに参加。帰国後、日本トールシップクラブを設立。1990年に大儀見 薫氏らと「日本青年帆船協会」（現 日本セイルトレーニング協会）を立ち上げ、翌91年から帆船〈海星〉でセイルトレーニング事業を開始。93年に国土交通省所轄の財団法人として設立。1998年に同協会を離れ、2002年まで〈あこがれ〉の事業に参画。現在は米国系ライブエンターテインメント企業の日本法人代表を務める。

というのは、うれしい想定外だったという。

誕生するまでは苦労もあったが、生まれてからは順調に育っていった〈あこがれ〉と〈海星〉。この二隻の帆船が船出をして沖を目ざした1990年代は、わが国におけるセイルトレーニング黄金期だったと言えるだろう。

東アジアにやって来た世界の帆船レース

〈あこがれ〉や〈海星〉の誕生に前後して、日本国内には、ハウステンボスが一般客を乗せてクルージングに使う目的で建造したバーク型帆船〈咸臨丸^{かんりんまる}〉や、以前からチャータークルージングなどに使われていたシーボニアマリーナのガブリゲケッチ〈シナラ〉などが稼働しており、航海訓練所のバーク型帆船〈海王丸〉も再建造されたところだった。



〈あこがれ〉や〈海星〉を生んだ原点になった「'83大阪世界帆船まつり」。97年には、レースも含めたさらに大きなイベント「SAIL OSAKA '97」が開催された



〈海王丸〉の航海でシュラウドを駆け上がる、一般の体験訓練生（研修生）。同船は、いまでも一部の航海で一般人も受け入れている



2002年に行われた「地球人航海／韓国2002」に参加したときの〈海星〉。激しい海況を進み、デッキが波に洗われた



「SAIL OSAKA '97」公式ガイドブックの表紙。何万人もの人が、この本を手にも世界の帆船を見に大阪港に集まった



五十嵐英男（いがらし・ひろお）

1944年大阪府生まれ。大阪市港湾局を経て、現在は公益社団法人 大阪港振興協会会長。「'83大阪世界帆船まつり」を皮切りに、「メルボルン大阪ダブルハンドヨットレース」、「SAIL OSAKA '97」、「ワールドセイル2000」などの帆船、ヨットのイベントに参画する傍ら、〈あこがれ〉の運営責任者として長年にわたって尽力。今年3月には、〈あこがれ〉を代表してMJCマリン賞2013大賞を受賞した。

「〈あこがれ〉に乗った人たちの感想文は、どれも感動的な内容だった」

特に、〈海王丸〉は再建造の際に一般からも資金を募ったことで、航海訓練の一部に民間人も乗せるようになったため、以前に比べてはるかに身近な存在になっていた。

こうした背景もあって、1990年代には帆船に絡むさまざまなイベントが全国各地で催されるようになり、1995年に「海の日」が祝日に制定されてからは、7月の当日の記念イベントに駆け出されるケースも増えていった。

「当時は海の祭典イベントがたくさん企画され、東京だけでも〈海星〉は帆船パレードに9回出ています。振り返れば、よ

き時代でした」（今井氏）

セイルトレーニング事業に励む傍ら、いろいろなイベント主催者から参加の依頼が舞い込むようになっていた〈あこがれ〉や〈海星〉。そんな世間の反応を背に、やがて大阪市港湾局が「'83大阪世界帆船まつり」を超えるビッグイベントを、大阪港築港100年を迎える1997年に開催する構想を打ち立てた。

「当時、大阪市港湾局ではメルボルン大阪ダブルハンドヨットレースを開催していたので、〈あこがれ〉の運用に

おいても、セイルトレーニングの事業に加えて、ヨーロッパのように帆船レースも行いたいと考えていました。すでに、全国各地で帆船パレードが開催されるようになっていましたが、さらにレースとなれば世間の関心も大いに高まります」（山岡氏）



右：公式記録集に記された「SAIL OSAKA '97」のレースコース図。三つのレグに分かれ、第2レグは参加船同士がトレーニーやクルーを交換して走る、交流のための航海「クルーズ・イン・カンパニー」が企画・実行された

上：「'83大阪世界帆船まつり」に負けないにぎわいとなった、14年後の「SAIL OSAKA '97」の帆船一般公開。ここで帆船や海に憧れを抱いた子供たちも多かったはずである





トレーニングで〈あこがれ〉の展帆作業に励む人たち。大人も子供も一緒になって、同じ思い出を心に刻んだ

「帆船レースのアジア開催は、 〈あこがれ〉に関わった人たちの夢だった」

山岡真澄（やまおか・ますみ）

1956年大阪府生まれ。大阪港振興協会、大阪港開発技術協会を経て、現在は大阪港埠頭株式会社に勤務。五十嵐氏と同様、大阪市の帆船、ヨットの国際イベントに参画する傍ら、〈あこがれ〉の運営・広報担当として長年にわたって尽力した。



帆船レースのアジア開催は、〈あこがれ〉の運営に関わった担当者たちの夢だったと語る山岡氏。「83大阪世界帆船まつり」以来、大阪市港湾局には世界の帆船事情に関する情報が入っていた。だから〈あこがれ〉の誕生を機に、その大いなる海洋文化を日本にも紹介したいと願っていたのである。

また、今井氏も、かつてオーストラリアの帆船レースに出場した際、その資料を集めて開催ノウハウを勉強していたため、大阪市港湾局が抱いた構想を耳にしてレースの企画案を提出。こうした流れのなかで、東アジア初の国際帆船レースが描かれていった。

「世界中の帆船を極東の地に集めなければならないので、約2年間は各国を回って参加をお願いし、レースのスタート地になった香港とは、帆船の係留場所やイベント会場の確保といった問題を話し合わなければなりませんでした」（五十嵐英男氏）

こうした努力の結果、世界18カ国・地域から53隻の帆船と外洋ヨットが参加を

表明して、「SAIL OSAKA '97」が1997年3月に開催。第1レース（香港～沖縄）、クルーズ・イン・カンパニー（交流クルーズ／沖縄～鹿児島）、第2レース（鹿児島～大阪）に続き、レース終了後の4月29日には、イベントの最後を締める大阪湾の帆船パレードが行われ、大阪港は10万人を超える人出でにぎわった。

20年で消えた夢

セールトレーニング事業を順調に進め、「SAIL OSAKA '97」というビッグイベントでホストシップの大役を果たした〈あこがれ〉、そして国内参加の一翼を担った〈海星〉。しかし、バブル経済崩壊以降、くすぶり続けていた不景気の余波が、1990年代後半になって〈海星〉に押し寄せた。「当初は多くの企業から支援を受け、事業そのものも利益を出していたので、順調に推移すれば日本も海洋国家の道を歩むことができると思いましたが、経営環境の悪化とともに寄付を打ち切る企業が増え始め、1998年になると組織を改めて再チャレンジしなければならない事態になってしまいました」（今井氏）

そこで潔く身を引いた今井氏。もう帆船から足を洗おうと考えたそうだが、これまでのお礼を兼ねて大阪市港湾局に挨拶に出向くと、「それなら〈あこがれ〉の

仕事を手伝ってほしい」と五十嵐英男氏らから声を掛けられた。

「辞める挨拶に行って、まさか勧誘されるとは思いませんでしたが、〈海星〉でやり残した仕事の一つあったので、〈あこがれ〉を通してやってみたいと考えました」

それは、帆船を使った学校教育用のプログラムを広めることだった。行政機関が所有する〈あこがれ〉なら、小中学校へのアプローチもしやすいのではないかと考えたのだった。

「その後、〈あこがれ〉は大阪市のオリンピック招致活動の一環で『ワールドセイル2000』という世界一周航海に船出したので、生徒が航海中の船長と電子メールを交換しながら海や地球の話題を追いかける総合学習を行いました。そして、賛同してくれた学校の数こそ少なかったものの、日本財団の助成を受けて小中学生の体験航海も実施してみました。客船の修学旅行でも危険だというPTAもある昨今、大阪市はよくぞ理解して帆船を授業に使ってくれたと思います」



久下剛也（くげ・たつや）

1962年兵庫県生まれ。〈あこがれ〉進水時からクルーとして乗船し、船の運用、トレーニーの指導などに励みながら、「SAIL OSAKA '97」、「ワールドセイル2000」などのイベントレース、航海にも参加。2008年から最後のキャプテンを務め、今年3月の事業終了まで〈あこがれ〉に乗船した。

「〈あこがれ〉がなくなっても、
将来への種はたくさん蒔かれている」



「ワールドセイル2000」で大海原を走る〈あこがれ〉。シュラウドを上がる人たちの姿が誇らしげだ

今井氏が加わって新たな事業の展開が見えた〈あこがれ〉。ワールドセイル2000も無事に終えて貴重な航海体験も山ほど積んだが、〈海星〉と同じように〈あこがれ〉も時代の流れを受けて身動きが取れない状態になってしまった。2011年に市政が変わったことをきっかけに、さまざまな事業が見直され、セールトレーニング事業の不要論が浮上。2013年3月をもって、事業の廃止と〈あこがれ〉の売却が決まってしまったのだ。

「昨年度は、8校の小学生約500人が〈あこがれ〉で体験学習をしてくれました。

議会や教育関係者などから、『そんな体験は、何の教育効果もない』と言われる一方、こうして徐々に帆船で海に出ることへの理解が広まりつつある矢先の事業廃止だったので、残念でなりません」（五十嵐氏）

「実際には学校教育のなかで帆船を使っている国もあり、各校から参加した知らない子同士を乗せて、社会性や自主性を学ばせています」（山岡氏）

1990年代前半、日本も海洋国家らしい道を歩めるようになるかもしれないと期待を膨らました今井氏。しかし、それから20



「ワールドセイル2000」でボストン〜ハリファックスの航海に参加したトレーニーたち。まさに寝食を共にした国際交流が実現した



ヤード上で展帆作業に挑むトレーニー。海面からの高さは30mにもなり、やり抜いたときの達成感はたてえようもない

年で〈海星〉も〈あこがれ〉も姿を消してしまうと、誰が想像しただろうか。毎年、帆船レースを行っているヨーロッパが、また遠い存在になってしまうのが寂しい限りである。

5万人が受け継ぐ未来

今年3月、「この機会を逃したら二度とチャンスがない」という声を受け、〈あこがれ〉に授けられた「MJCマリン賞2013大賞」。授賞式に出席するため、大阪からやって来た五十嵐氏、山岡氏、久下氏に、東京在住の今井氏が加わって本記事のインタビューが実現した。彼らが語った振り返りのコメントを紹介したい。

「行政が積極的に文化事業に関わるという、佐々木 伸さん（元大阪市助役）の下でメルボルン大阪ダブルハンドヨットレースや帆船〈あこがれ〉の仕事を行い、その結果、私を含めて実には大勢の市民が海外と交流を重ねることができました。この20年で、海の文化と人とのつながりの大切さを多くの人が学んだと思います。〈あこがれ〉はなくなりますが、〈海星〉と合わせて5万人以上の人々がセールトレーニングを経験したという実績は残ります。しかも、ボランティアの絆も消えないでしょうから、皆で手を携えながら何か小さなことで



2012年3月11日、〈あこがれ〉は「東日本大震災1周年メッセージセイル」を実施。たくさんの寄せ書きが、心をつなぐセイルになった

いいから帆船のスピリットをつないでいきたいと思います」(山岡真澄氏)

「セイルトレーニングは、これから多くの
人から求められる事業であるはずです。
思えば、いま私は大儀見さんが第1回メ
ルボルン大阪ダブルハンドヨットレースに
挑んだ年齢です。これから私でも何かで
きるかもしれません。〈海星〉が誕生した
ときのように、必然性のある偶然が重なっ
て何かが、誰かが動くことがあるかもしれ
ませんから、そのときにはまたチャレンジ
したいし、それができる自分でありたいと
思っています」(今井常夫氏)

「〈あこがれ〉に乗った人たちの感想文
を読むと、どれも感動的で、読む私たち
スタッフを虜(トビ)にしてくれます。特に子供が書
いた文は、大人でもこれほど感情豊かに
表現できるかと思うほどの出来栄のもの
が多いので、帆船によって養われる教
育的な効果を実感せずにはいられません。
大人だって大海原で見る満天の星
に感動するはずで、こんなロマンあふれ
る体験をした子供たちの将来が楽しみです」(五十嵐英男氏)

「子供は大人に叱られたり遊ばせても
らったりしながら育ちます。最後の航海に
も大勢の子供が乗ってくれたので、その

体験を糧に大きく育ってくれたらいいなと
思っています。そのため私は、『君たち
は、(帆船に乗せてくれた)大人たちに借
りがあるんだよ』と言いました。彼らが大人
になって社会の中枢を担うようになったと
き、〈あこがれ〉に乗った感動を思い出し
て、そのときの子供たちに同じ体験をさせ
てあげたいと思ってくれるものと信じてい
ます。〈あこがれ〉はなくなりますが、将来
への種はたくさん蒔くことができたと思っ
ています」(久下剛也氏)

山岡氏が述べたように、〈あこがれ〉と
〈海星〉に乗った人は5万人を超えている。
だから、帆船はなくなってもセイルトレー
ニングの志だけは多くの人の心に生きてい
る。将来、彼らのなかから、第二の〈あこ
がれ〉、〈海星〉を進水させる人たちが現
れることを期待してやまない。



クリスマスのイルミネーションに飾られた〈あこがれ〉。もうこの姿が見られないのは寂しい限りだ



MJCマリン賞2013の授賞式。トレーニーたちも壇上に上がり、五十嵐氏や久下氏、山岡氏と一緒に受賞を祝った

記者の目

本記事初となる3話連載となった〈あこがれ〉、〈海星〉のストーリー。私事で恐縮だが、かつて「SAIL OSAKA '97」公式記録集の取材で、山崎武敏カメラマンと帆船レースを追ってヨーロッパを回った思い出がよみがえる。そのとき、英国やデンマーク、アメリカの帆船などが大勢の青少年を乗せて旅してい

たが、こうして、かの国々では、教室では学ぶことのできない海の自然体験や仲間と苦楽を共にする人間教育を進めている。〈あこがれ〉の存続をめぐる、教育的効果が得られないという意見が出たそうだが、そう考える人々には、ぜひ海外に出てセイルトレーニングの現場を見ていただきたいと思う。